

ほど上流に行つたところに、馬場あき子さんがマンションを買ったので、ある冬の日、出かけていった。

馬場さんの夫・岩田正さんがカクテルに凝つておられて、十数種のカクテル名を記したメニューまで作つていった。客が来るときシェーカーを振つてふるまうのである。面白がつて、メニューにある全部を飲もうということになつた。無事飲みつくしたのだが、帰りが大変だった。自転車にうまく乗れないのだ。土手道で自動車が来ないからよかつたが、コンクリートの道路に転倒。買つたばかりの革ジャンパーが裂け、腕に大きな擦過傷を負い血だらけになつて帰宅した。まだ、二、三回しか着たことがない高価な革ジャンだった。

たりも珍しくなかつた。

頬綱が生まれる少し前に、せつかく子供が生まれるのだから新しい家で幼少期をすごさせてやろう、ということで無理して家を新築することにした。それまで私は平屋にしか住んだことがなかつた（南風ビラは二階住まいだつたが）。はじめての二階建てということでやたら嬉しかつた。書斎を二階に作つた。建築の途中なのに、二階にのぼり窓から下を眺めて一人で感動したりした。

設計を頼んだのは小学校の同級生で建築事務所を開いていた泉義弘君。コンクリート製である。一階に二十畳ほどの書庫を造つた。地震が来ても大丈夫なように、基礎を深くまで掘り下げてもらつた。基本構造だけを頑丈にして、他は徹底して簡素に造つた。コンクリートは打ちっぱなし。税務署の人が二人やってきて「精一杯安い内装ですね」と感心して帰つた。金がなかつたのである。

その後、三、四回外壁を塗り替えたり、絨毯を張り替えたり、何度も手当はしてきたが、本格的な改築ははじめてである。案はほとんど朋子が考えた。もと頬綱の部屋は風呂場になるらしい。書斎の扉がドアから引戸にならいい。さてどんな家になるのか。

朋子と結婚して、近所の世田谷区瀬田の二DKのマンションに住んだ。三年間ぐらいたつたか。三階建ての小さなマンションの二階だつた。堅山南風という有名な日本画家がオーナーで「南風ビラ」という名前だつた。よく酒を飲んだ時代で、このマンションにも多くの友人が飲みに来た。吉増剛造がきたこともあつた。私が結婚したのは三十八歳。当時は晩婚だつた。新婚家庭はどんなだつたことか。まだ若かつた晋樹隆彦、福島泰樹、小紋潤らも何度か飲みにきた。正月だつたと思う。取つ組み合いの喧嘩がはじまり、新築マンションのふすまを大破してしまつたこともあつた。そのころは、酒を飲んで文学論・短歌論をはじめると、たいてい喧嘩になつた。そんな時代だつたのだ。殴つたり殴られ